

日々の授業・保育の充実に向けて 令和6年度学校訪問の総括

本資料は、幼稚園6園、小学校16校、中学校8校、特別支援学校1校において実施いたしました令和6年度の学校訪問（計画訪問、表簿訪問）を総括するものです。

日々の授業・保育の充実や適切な表簿管理等に向けてご活用ください。



福島市教育委員会

目 次

- ☆ 確かな学力の育成のために …… P. 1
- ☆ 「全国学力・学習状況調査」と「ふくしま学力調査」の結果を踏まえた取組 …… P. 5
- ☆ 子どもを主語にした授業を目指す！
～授業の設計図としての学習指導案～ …… P. 6
- ☆ 自らの学びをマネジメント「管理」する力を育むために …… P. 7
- ☆ 道徳科授業の充実に向けて …… P. 8
～「深い学び」を実現するために～
- ☆ 子どもが主語の学びの実現に向けて（ICTの活用） …… P. 9
- ☆ 特別支援教育の充実に向けて …… P. 10
- ☆ 新たな不登校を生まない学校づくりと不登校児童生徒への支援…P. 11
いじめへの対応
- ☆ 幼稚園訪問を終えて …… P. 12
- ☆ 表簿訪問 ～チェックシート～ …… P. 13



わたしは「ゆだ☆ちゃん」。
日々の授業の中に、子どもたちに学びをゆだねる場面を
どんどん取り入れ、子どもたちが「楽しい」と感じるこ
とができる授業づくりを進めていきましょう。

<はじめに>

令和6年度は、幼稚園6園、小学校16校、中学校8校、特別支援学校1校で学校訪問や表簿訪問を実施しました。訪問した各校においては、「授業5（ファイブ）」と「指導5（ファイブ）」を踏まえて、日々の授業の改善に向け真摯に取り組んでいただいている様子が見られました。

本資料は、令和6年度の学校訪問を総括するものです。日々の授業・保育の改善・充実、適切な表簿管理等に向けて、常に傍らに置きご活用いただきたいと思います。

確かな学力の育成のために

学校訪問で参観させていただいた授業について、「令和6年度学校教育指導の重点」に示した「授業5（ファイブ）」の各段階について振り返ります。今年度はさらに「子どもを主語にした授業づくり」という視点を踏まえ、ぜひ参考にしたい内容を○で、改善を図りたい内容を▲で表記します。

めあて・課題



この段階では、教師の「教えたい」「学ばせたい」を、子どもの「知りたい」「学びたい」につなげ、子どもたちの学びに向かう意欲を引き出すことが必要です。そのためには、子どもの思いや願いと、教師の願いを基に、本時のねらいが達成できるように「めあて・課題」を設定する必要があります。

さらに、「めあて・課題」は焦点化されていて、どの子どもでも何について考えればよいのかわかるようにすること、「この課題について学んでみたい」という意欲や「この課題なら解決できそうだ」という見通しをもてるようなものにする 것도大切です。「めあて・課題」の設定が、その後の子どもたちの学びの質を左右します。また、「めあて・課題」の設定は「子どもを主語にした授業づくり」を具現する上でも大変重要です。

- 子どもとともに単元（題材）計画を立てることにより、本時では何を学習するのが明確となり、子どもが主体的に学習に取り組む姿が見られた。
- 本時のめあてとともに、単元のゴールも併せて提示することで、本時の学習への必要感を高めるとともに、本時のめあてが達成できた子どもは、自分で単元のゴールに向けた新しい課題を見つけ、取り組んでいた。
- 子どもとの対話や前時の振り返りから、学ぶ必要感のあるめあてにつなげる授業が見られた。
- めあての設定を5分以内に行うことで、その後の展開の時間を多く確保することができていた。
- 問題文を提示し、まず子どもたちに解かせることにより、子どものつまずきや誤答を明らかにし、本時のめあてへとつなげていく授業が見られた。「ここが本時で解決するべき点である」と、追究の対象を焦点化して捉えさせることが、主体的に学びに向かう子どもの姿につながっていた。
- 「できる→できる→できない」という流れで問題を提示したり、提示された問題に挑戦する機会を確保したりする等の導入をすることによって、前時までの学習内容とのずれに着目させ、子どもから問いを引き出す場面が見られた。
- 普段から自由な発言を認める雰囲気のもとで、自分の思いや考えを素直に表現する子どもたちに寄り添い、発言内容を生かしながらめあてを設定していた。
- ▲ めあてが教師主導で設定されている授業が見られた。子どもの興味・関心、疑問等から課題をつくり、学ぶ必然性が生じるように、子どもの思いをくみ取る工夫が必要である。
- ▲ これを学ぶことで、何ができるようになるのか、という必要感をもたせるためのめあての設定と提示の工夫がさらに必要である。
- ▲ 子どもに委ねる自力解決の時間に直結するめあて・課題づくりをしていくことが大切である。
- ▲ 授業の導入において、前時の復習の場面を設定する授業がいくつか見られた。本時の学習において前時の見方・考え方が有効に働く内容なら意味のある活動であるが、本時の学習と直結しない内容であれば、時間をかける場面はどこかをよく吟味する必要がある

自力解決



「めあて・課題」に対して子ども一人ひとりが解決のために追究する活動が「自力解決」です。その際重要なのが、子どもが解決までの見通しをもてるよう工夫をすること、そして、考える時間を十分に確保することです。しかしそれでも、自力解決が思うように進まず、解決意欲が下がってしまう子どもが出てきてしまいます。そこで、個に応じた支援が必要になります。自力解決の場面は「子どもを主語にした授業づくり」に欠かせない子どもに学びをゆだねやすい場面でもあります。

- 「何が分かればいいのか」「どんな方法があるかな」などの発問により、結果や方法について見通しをもたせるとともに、学習内容の焦点化を図ってから子どもに委ねることで、安心して学びを進める子どもの姿が見られた。
- 自力解決中に、子どものつばやきを広めたり、作業や話し合いを促したりするサポートをすることで、子どもが自らポイントに気付けるように配慮していた。
- 予想される正しい解法のみならず、予想される誤答やその誤答にいたる経緯についても想定しておき、学びを委ねた後に躓いてしまった子どもを教師が適切に見取り、支援をしていた。
- 机間支援により子どものつまずきや誤答を見取り、授業展開に柔軟に生かす授業が見られた。机間支援は「何を見取るために」「どのタイミングで」行うのかについて、再確認する必要がある。
- ある理科の授業では、予備実験を十分におこない、授業中では子どもだけで課題解決ができるよう、実験の設定がなされていた。
- 発問に対する子どもの考えに対し、問い返しを用意している授業が増えてきた。子どもの予想される反応を考え、問い返しを行うことで、道徳的価値に対する深い学びが実現されていた。
- ▲ 教師の話す時間が長く、自力解決の時間が十分に確保されていないケースがある。教師が手順をすべて示すのではなく、思い切って「子どもに委ねる」といった授業観の転換が必要である。
- ▲ 教師からの指示のみで自力解決の時間が始まってしまい、子どもが戸惑うことがあった。見通しがもてたかを子どもに確認したり、見取ったりすることで、自力解決中に教師があれこれ追加の指示を出さなくても活動を進められるようにしたい。
- ▲ 課題解決のための視点を与えられないまま自力解決に入ったり、時間の配分が適切でなかったりしたため、自分の意見をまとめられない子どももいた。
- ▲ 児童・生徒の特性や困り感に応じた支援が必要な場面が見られた。児童・生徒のつまずきを予想し、自力解決できるような手立てを講じておくことが大切である。
- ▲ 自分の考えをノートに書き終えた子どもが、次の指示を待つだけの姿が見られた。「ほかに解決方法がないか探してみる」「自分の考えと友だちの考えと比べてみる」など、追究を続ける学び方を育てていく必要がある。
- ▲ 学びを子どもに委ねたからには、子どもの力を信じて任せたい。教師の指示や説明は極力控えて、子どもが学び取る姿を見守りたい。

発表・話し合い



発表・話し合いの場面では、子どもたちの意見や考えをつなぎ、学びを深めていくために、思考を共有・吟味するための教師の積極的な働きかけが重要です。教師は、「つなぐ・ゆさぶる・認める」などを意識した発問や問い返しを行ったり、子どもの表情やうなずき、つばやきなどを見取り、意図的指名を行ったりするなどの働きかけが求められます。

さらに、子どもたちが他の児童生徒と自由に意見交流したり、質問したり教え合ったりするなど、子どもに学びをゆだねるチャンスでもあります。

- 自力解決の時間、グループで話し合う時間をそれぞれしっかり確保することで、感じ取ったことと音楽を形づくっている要素とを結びつけることができていた。
- 子どもが発表した意見に対し、教師が理由や根拠を問い返すことで話し合いが深まる展開が多く見られた。友だちと意見は同じでも理由が違うなど、自分なりの考えが次々と出される展開も多く見られた。
- ICTを効果的に活用して個々の考えを可視化・共有することで、友達の考えとの比較や関連など考えを広げたり深めたりする様子が見られた。
- Google Classroom にフォルダのリンクを貼り、フォルダの中に子どもたちが撮影した写真を入れ、その写真にそれぞれが気付いたことを書き込み、気付きや疑問点を共有していた。
- ペアによる話し合いを設定する際に「〇〇が説明できたら座りましょう」と「本時における重要な学習内容を全員に表現させる」という明確な目的をもってペア活動を取り入れる授業が見られた。「誰に何を話すか」が明確であるため、不明な点を相手に尋ねたり、わかりやすく伝えようと表現を工夫したりする子どもの姿が見られた。
- 読み物資料で登場人物の価値が実現される姿について話し合う際に、人間の弱さに向き合わせ、そのような行為に至るまでの心の動きに着目させようとする教師の働きかけが多く見られた。
 - ▲ 個人で考えをまとめずに、班でいきなり話を始めたために、即答できる一部の生徒の発表のみで終わってしまう様子があった。
 - ▲ グループ内で考えを紹介し合い、全体の場で代表者が発表するにとどまる様子があった。また、教師が期待している発言ばかりを取り上げてしまうような場面も見受けられた。
 - ▲ 「発表・話し合い場面」の設定を重視するあまり、子どもが必要と感じていない情報のやりとりの時間になってしまい、かえって集中力を低下させる結果になってしまう場合が多かった。話し合いの中で、新鮮なおどろきを得られるような観点の設定などが重要である。
 - ▲ 班で話し合った後は、決まって班ごとの発表により全体で共有することになるが、班活動の目的は何かを考えると全部の班が話し合いの結果を発表する必要があるか吟味する必要がある。

まとめ・適用



まとめの段階では、本時の学習を通して「何がわかったのか」「何ができようになったのか」「どんな力が身に付いたのか」などが明らかになるよう、本時のねらいに沿ったまとめを行う必要があります。そのためには、子どもたちに「どのような力を身に付けさせたいか」「それは、どのような姿なのか」をより具体的にイメージすることが重要です。

また、適用については、学習内容の定着を図るために、授業時間内に確実に位置づけることが必要です。

- 板書を手がかりにキーワードをつないで、自分の力で学習のまとめをノートに書くことができるよう工夫されていた。
- イラスト、文字、写真をとって書き込む等、自分なりのまとめ方や、記憶に残りやすいまとめ方ができる子どもが増えてきた。
- 子どもが思考を整理するための手がかりになるよう、板書事項が精選された授業が見られた。まとめの場面で、板書を参考にして発言したり、ノートに書きまとめたりしている姿が見られた。
- 何通りかのまとめが考えられるケースにおいて、子どもの考えを十分に生かしながらまとめている授業があった。発表した子どもも自分のまとめが認められ自己肯定感を高める様子があった。
- 「今日のまとめは〇〇かな」と、自ら本時のまとめを考えようとする子どもの姿が見られた。「自分自身でまとめにふさわしい表現を考える」という学び方を身に付けることにより、本時の学びを振り返り、学習内容の要点や次に生かしたい見方・考え方を自覚する子どもの姿につながった。
- 互いの作品を見合ったり、作者の制作意図を聞いたりすることで、様々な考え方に触れ、見方、考え方を広げるまとめが行われている。
- 道徳の時間のまとめは1つとは限らないので、子どもたちの複数の考えをまとめとして板書する授業が増えてきた。
- 特別支援学級(知的)の子どもたちが適用問題として、AIドリルに、支援を必要とせず黙々と取り組

んでいる姿が印象的であった。

- ▲ めあてとまとめのつながりを大切にしていきたい。課題に対するまとめを明確にすることで、学んだことを日常生活に生かすことができるようになってくる。
- ▲ めあてとまとめの整合性を意識するあまり、まとめの表現が本時で大切にしたい見方・考え方とずれてしまうような授業が見られた。
- ▲ 本時のポイントとなる言葉や内容を確認しないまま、まとめの文を書かせたことで、ポイントが不明確なまとめとなってしまいうケースが見られた。また、まとめの場面での教師の説明が「ここがああなって、そうなるんだね」と指示語ばかりの言葉でなされている授業があった。
- ▲ 授業内での子どもの発言が生かされず、教師が準備したまとめを受動的にノートに書き留めるような展開が見られた。子どもが課題を解決したという実感がもてるようなまとめ方を工夫したい。
- ▲ 依然として、制作途中となり、まとめの時間が確保できず終わってしまう授業も多い。
- ▲ 道徳の授業において「自己を見つめる」、「自己（人間として）の生き方を考える」時間を設けていない授業が見られる。

振り返り



「振り返り」は、授業における気付きや学びの深まりを子どもたち自身が自覚し、さらに新しい学びへとつなげるために行うものです。まずは子どもたちが「振り返り」を行うことの意義や具体的な内容、方法を理解できるようにするとともに、振り返りの視点を提示することが必要です。

「振り返り」によって、学習内容が理解できた実感を得て、教師や友達と一緒に学ぶことの楽しさを感じる時間が、授業の最後に準備されているということが大切です。

- 振り返りでの子どもの具体的な姿（どんなことをノートに書いてほしいか、話してほしいか）を明確にしている授業が数多く見られた。
- 振り返りを継続的に行うことで、子どもがすぐに取り組む習慣ができていた。計画的に振り返りを行うために、単元の振り返りの表を作成していた。
- まとめと振り返りを必ず15分とっている学校があった。時間を確保することで、自分の学びの姿を具体的に書ける子どもが多く見られた。
- 1冊のノートに1年間を通して振り返りを書かせている先生がいた。1学期の初めは、1文で終わっていた子どもが、2学期後半になると、1ページにびっしりと書けるようになっていた。
- 自己の変容に気付かせるような振り返りが見られた。学びの振り返りを通して、子どもが自己の成長にも気付くことができるようにしていきたい。
- 視点が明示された「振り返りシート」を活用することで、単元を通じた自己の学びを振り返ることができていた。また、子どもの振り返りの内容を次時の学習に上手につなげている授業も見られた。
- 探究の過程（課題・予想・実験・結果・考察・まとめ）を踏んだ内容で板書された授業では、子どもたちが本時の学びを振り返るうえで効果的であった。
- ▲ 振り返りまで至らずに授業が終わる授業が数多く見られた。導入を短くし、発問を精選するなど、タイムマネジメントの見直しが必要である。
- ▲ 「まとめ」と「振り返り」がまとめて記載されている、あるいはどちらかしか記載されていないような指導案が見られた。また、子どもが振り返りを書けなかったり（振り返る内容が乏しい授業）、まとめの内容と同じことを書いたりする振り返りもあった。教師や生徒が振り返りの意義を認識する必要がある。
- ▲ 自立した学習者を育てるために、「学び方」（本時に働かせた見方・考え方）を視点とした振り返りを行いたい。繰り返し行うことで、いずれは教師に促されなくても子ども自身が見方・考え方を働かせて学びを進める姿につながるものと思われる。
- ▲ 自立した学習者を育てるためには、振り返りの時間に「学んだこと」だけでなく、「学び方」（タブレット端末の活用の仕方、自分の考えを整理した過程など）を振り返ることが必要である。

全国学力・学習状況調査とふくしま学力調査の結果を踏まえた取組

1 全国学力・学習状況調査

(1) 全国学力・学習状況調査の結果から
～教科に関する調査の結果（平均正答率）※国語、算数・数学を記載～

	国語			算数			国語			数学		
	福島市	福島県	全国									
R31(R1)	63	64	63.8	65	65	66.6	72	72	72.8	59	57	59.8
R3	65	64	64.7	69	67	70.2	67	65	64.6	57	55	57.2
R4	65	64	65.6	62	61	63.3	68	68	69	47	47	51.4
R5	69	67	67.2	63	61	62.5	70	69	69.8	47	46	51
R6	66	66	67.7	61	60	63.4	60	57	58.1	50	48	52.5

- 小学校6年 **【県との比較】** 国語は同じ、算数はやや上回っている。
【全国との比較】 国語はやや下回っている、算数は下回っている。
 - 中学校3年 **【県との比較】** 国語、数学ともに上回っている。
【全国との比較】 国語はやや上回っている、数学は下回っている。
- ※ 平均正答率において
 差が1ポイント未満 → 「ほぼ同じ」
 差が1ポイント以上、2ポイント未満 → 「やや上回っている」「やや下回っている」
 差が2ポイント以上 → 「上回っている」「下回っている」

(2) 育てたい資質・能力

小学校6年

国語

- ① 自分の考えを伝えるときに、相手や目的にあわせて資料を活用する力
- ② 登場人物の相互関係や心情などについて、複数の描写を結び付けて捉える力

算数

- ① 示された場面を解釈し、数量の関係を捉え、正しく式に表す力
- ② わる数が小数のわり算について、正しく計算する力

中学校3年

国語

- ① 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝えるように話す力
- ② 話題や展開を捉えながら話し合い、発言を結び付けて自分の考えをまとめる力

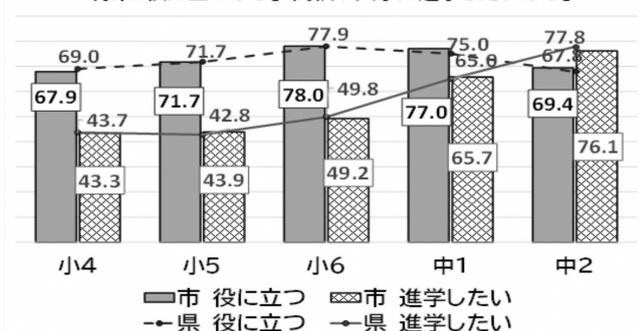
数学

- ① 目的に応じて式を変形して、事柄が成り立つ理由を説明する力
- ② 複数の集団のデータの分布の傾向を読み取る力

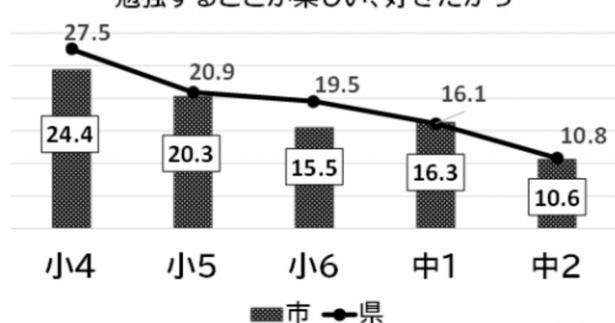
2 ふくしま学力調査

児童・生徒質問紙調査（「あなたが勉強する理由は何ですか」）の結果から

「将来、役に立つから」「高校や大学に進学したいから」



勉強することが楽しい、好きだから



勉強する理由として、回答の割合が高い項目は、「将来、役に立つから」や「高校や大学に進学したいから」でした。「高校や大学に進学したいから」については、学年が上がるにつれ、その割合が高くなる傾向が見られます。

一方、「勉強することが楽しい、好きだから」の割合は、小学4年生の24.4%が最も高く、学年が上がるにつれて、その割合は減少します。児童生徒一人ひとりが、わかる・できる喜びや、学びが意義を十分感じられるよう、主体的な学び、協働的な学びの実現に向け、日々の授業を改善していくことが求められます。

子どもを主語にした授業を目指す！～授業の設計図としての学習指導案～

学習指導案を作成する前に、学習指導要領解説で内容等を確認し、教科書等を通じた教材分析や予備実験等を行うことが大切です。



<例> 第〇学年〇組 〇〇科学習指導案

令和〇年〇月〇日 (〇) 〇校時
場所：〇〇室 授業者：〇〇〇

1 単元(題材)名

2 単元(題材)の目標

★子どもの学習目標で記載する

※ 評価規準を記載する場合は、各教科等の目標を踏まえて作成する。その際、「主体的に学習に取り組む態度」の観点から、評価を通じて見取る部分を整理し、示す必要がある。

3 単元(題材)について

(1) 単元(題材)の特徴(教材観)

本単元(題材)は、〇〇〇〇

(2) 子どもの姿(児童観/生徒観)

本学級の子どもたちは、〇〇

(3) 単元構想・授業構想(指導観)

本単元(題材)の指導にあたっては、
本時の指導にあたっては、〇〇〇〇

4 指導計画(総時数〇時間)

5 本時の指導

(1) 本時のねらい

(2) 板書案

(3) 学習過程/本時の展開

- ～できる。(知識及び技能)
- ～できる。(思考力、判断力、表現力等)
- ～しようとする。(学びに向かう力、人間性)

本単元のねらいや、重視する各教科の見方・考え方、児童・生徒がつまづきやすいポイント等の教材分析、系統性等について明記する。

教科が好きか、楽しく学習に向かっているか、などの情意面のみ記載ではなく、(1)単元(題材)の特徴(教材観)や既習事項に対する子どもの実態を、具体的なデータ等を用いながら記載すること。

(1)単元(題材)の特徴と(2)子どもの姿を踏まえて、本単元や本時の目標を達成するための具体的な手立てと、それによって目指す子どもの姿を明記する。

- ① (学習内容) ～について、
- ② (学習活動や手立て) ～することにより(～を通して)、
- ③ (目指す子どもの姿) ～することができる。

	学習活動・内容、予想されるこどもの反応	時間	○指導上の留意点	◇手立て	●評価
課題設定	1 本時の学習課題をとらえる。 (1) 前時の～ (2) 本時のめあて(課題)をとらえる。 めあて(課題) ●●は、なぜ〇〇なのだろうか？ (3) 課題を解決するための見通しをもつ。	5	○		
	2 自力解決をする (1) 課題を解く (2) 〇〇について話し合う。 (1) 互いの考えを発表し合う。 (2) 話し合い、本時の課題を解決する。		○	◇	
振り返り	4 本時のまとめをする。 まとめ ●●は～				
	5 振り返りをする。				

子どもが「解決したい！」と、必要感をもって探究するめあて(課題)になるよう吟味する(疑問形になることが望ましい)。また、子どもの問いを引き出す手立てについて、『○指導上の留意点』『◇手立て』に明記する。

教師主導の「〇〇させる」等の使役表現は用いない。例：「～(子どもの姿)するために、～(手立て)をする。」等

教師の手立てと、その結果としての期待する子どもの姿がセットになるように明記する。例：「～(教師の手立て)することを通して、生徒が～(子どもの姿)できるようにする。」等

● ～している。(発表、ノート、タブレット)

子どもが『めあて(課題)』を追究して自力解決により導いた「解」として適切か、『めあて(課題)』と整合しているか吟味する。

各教科・領域の特質に応じた、具体的な振り返りのための手立てについて明記する。例：「〇〇日記を書く」「キーワード解説文に取り組む」

自らの学びをマネジメント「管理」する力を育むために

～「家庭学習のスタンダード（福島市版）」の活用を図る～

本市で目指す子どもの姿は

計画的に家庭学習に取り組む \rightarrow 中学校3年生54%^(※)以上

※ 全国学力・学習状況調査による「計画的に家庭学習に取り組んでいる生徒の割合」から、家庭での学習習慣の定着をはかる指標（令和7年度目標値）

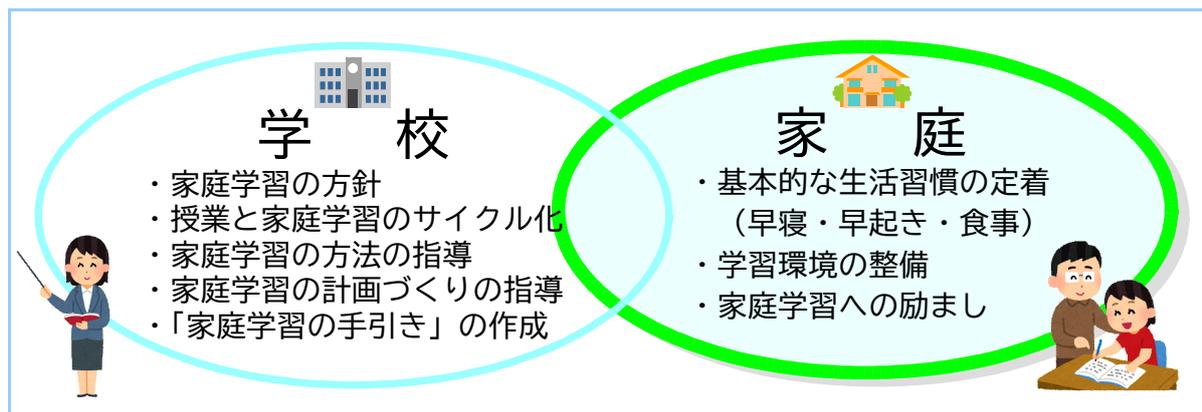


◆ 「家庭学習5（ファイブ）」をもとに具体的に指導しましょう。

- 1 家庭学習は系統的・計画的な指導により、自らの学びをマネジメントする資質・能力を育むものと共通理解する
- 2 家庭学習は学校（中学校区）全体で組織的に指導する
- 3 家庭学習は「宿題＋自主学习」である
- 4 家庭学習は「量」と「質」を重視する
- 5 家庭学習は学校と家庭が連携してこそ効果が上がる

◆ 家庭学習における学校と家庭の役割を明確にしましょう。

「家庭学習のスタンダード（福島市版）」における学校と家庭の役割



※ 「家庭学習スタンダード（福島市版）」及び「同保護者用リーフレット」は、白パソの全校共有フォルダの資料室及び福島市ポータルサイトにデータをアップしておりますので、積極的な活用をお願いします。

家庭学習の充実をさらに図るために

1 「授業とつながる」家庭学習の習慣づくりを行います。

教師が学校での授業内容と児童生徒が各家庭で取り組む学習内容の関連性や連続性を意識して指導することにより、授業と家庭学習が連動した望ましい学習サイクルを形成することが大切です。

2 「中学校区全体」で共通理解を図りながら家庭学習を推進します。

中学校区における幼・保・小・中学校及び保護者と共通理解を図りながら、「家庭学習の手引き」の自校化を図るなど、共通実践を心がけましょう。

3 「1人1台タブレット端末」の家庭での活用を推進します。

家庭学習において、児童生徒が一人一台タブレット端末を積極的に活用することができるよう、家庭へのタブレットの持ち帰りを積極的に進めましょう。

道徳科授業の充実に向けて ～「深い学び」を実現するために～

深い学びのある道徳科の授業を実現するためには、子どもが気づき、発見した道徳的価値の深い理解を基に、自己を見つめ、**自己理解**を深めることが重要です。自己理解とは、これまでの自分、そして**自分の現在地**（自分のできていることやできていないこと）、さらに、自分はどうなりたいかという理想の自分について理解することです。



小学校4年生

主題名 本当の友達って？ 教材名 「泣いた赤おに」(学研)

内容項目 B-10【友情、信頼】

〔第3学年及び第4学年〕

友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。



【授業の実際】

展開前段では、中心発問として、「人間の友達ができたのに、なぜ赤おには泣いたのかな。」と問い、子どもたちが考えたことを教師がコーディネートしながら考えを磨き合います。

C：大切な友達が自分のせいではなくなってしまったから。

T：どうして青おには大切な友達なの？

C：赤おにが困っていることを一緒に考えてくれた。

C：自分のことよりも赤おにのことを考えている。

T：「自分のことよりも」ってどういうこと？

C：青おには、自分のことをなぐるように赤おにに言った。

C：青おにが旅に出て姿を消したのは、赤おにと村人が仲良く過ごすことを願っている。

C：赤おにのことを青おには一番に考えている。



展開後段では、みんなで話し合ったことをもとに、今までの自分と友達について考える場を設定し、前段で子どもが考えたことと自分を照らし合わせて考え、「自己を見つめる（自己内対話）」時間を確保します。その際、過去の経験などを振り返らせながら、自分の考えや思いを理由とともに言語化し、それらを自覚的にとらえさせることが大切です。

これまでの自分 (過去の経験等)

・自分のできていることや
できていないことがわかる



落とし物をしたとき

僕も一緒に探す。



学習発表会の練習で

次は絶対できる！

スイミングの試験に
合格したとき



やったね！
おめでとう！

自分の現在地

・友達が困っている
ときは一緒に考えて
行動できていた。
・僕が困っている
とき、うれしいとき
は、いつも友達が声
をかけてくれた。



これからの自分 (理想の自分)

・成長を実感したり、
課題を修正したりする

実感

これからも、友達が困っている
ときは一緒になって考えたい！

修正

友達が元気なときは声をか
けて励ましたい！

修正

友達がうれしいときは自分も一
緒に喜びたい！

子どもが主語の学びの実現に向けて（ICT の活用）

○ 1人1台端末、クラウドの環境があるからこそ

先進的な取組を進め、子どもの資質・能力を育成するための授業づくりを推進している学校では、**子どもがクラウド環境を活用することで、他者の考え方を参照し、自分とは違う考え方について理解したり、自分の考えに自信がもてたりする**など、一人一人が積極的に学びに向かうことができるような授業が行われています。他にも、コメント機能を活用し、他者と協働する活動の中で、コミュニケーションがより豊かになっている授業も見られます。このような授業を実践している先生は、次のようなこととお話していました。

「今も昔も教師がやりたいことは大きく変わってはいません。しかし、現代では1人1台端末により、実現しやすくなりました。」

- ・ 一人一人にあった方法で学ばせたい
- ・ 自律した児童生徒を育みたい
- ・ もっと友だちの考えにふれさせたい



教師一人の力では難しかったけれど、クラウドや1人1台端末を活用すれば・・・

○ 子どもが主語の授業に向けて～個別最適な学び・協働的な学びへのステップ～

以下のようなステップを参考にしながら子どもが主語の学びの授業に向けて取り組んでいきましょう。

	学習の様子	使用ツールの特徴
↑ 主体のレベル	④ 子どもが 自分で理解が深まるような学習の流れを計画して学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習計画のために ・ Google Workspace を全体的に活用 ・ 動画作成など専門的な作業アプリ
	③ 先生が 子どもの理解が深まるような学習の流れを示して 子どもが それぞれ進める 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発表資料、学習状況の共有、学習の手引きに ・ Google Classroom で学習の手引きを作成 ・ 教育用アプリを知識習得、資料提示に
	② 先生が 子どもの理解が深まるような活動を準備して理解させる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 思考整理、資料共有、考えの共有 ・ 先生からの指示による思考、共有 ・ 教育用ツールやホワイトボードツールの活用
	① 先生が わかりやすく教える 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先生の説明の補助として

④が一番正しいというわけではありません。時には①も大切です。しかし、①だけでは、学習者主体の授業の実現は難しいでしょう。「ICT 活用」の主語が子どもである④の段階に向けて、①の授業のスタイルが多い先生は②を、②が増えてきたら③を・・・というように積極的に新しい授業にチャレンジしていきましょう。

○ 学習場面ごとの ICT の活用・情報の提示例

授業5	探究のサイクル	ICT の活用・情報の提示等
①めあて・課題	課題の設定	○ 「内容の板書」から「学び方の板書」へ
②自力解決	情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ○ 情報提示の工夫 ・ 切り替わる情報→大型提示装置 ・ 振り返りに残しておきたい情報→板書
③発表・話し合い	整理分析	<ul style="list-style-type: none"> ○ 個々の学習状況の可視化 ○ クラウド上で意見や情報の共有や参照(白紙の共有) ○ 授業支援アプリの思考ツールの活用
④まとめ・適用	まとめ・表現	○ 振り返りで相互参照 友だちの記述を参照しながら学習内容を振り返る
⑤振り返り		

デジタルは資料として活用、計算や考えはノートに、空間図形などはデジタルと共に実物を活用する等、情報の量や種類、情報の共有・記録の有無等により、1人1台端末の活用方法を教師が示したり、子どもたちに選択させたりしてください。

特別支援教育の充実に向けて

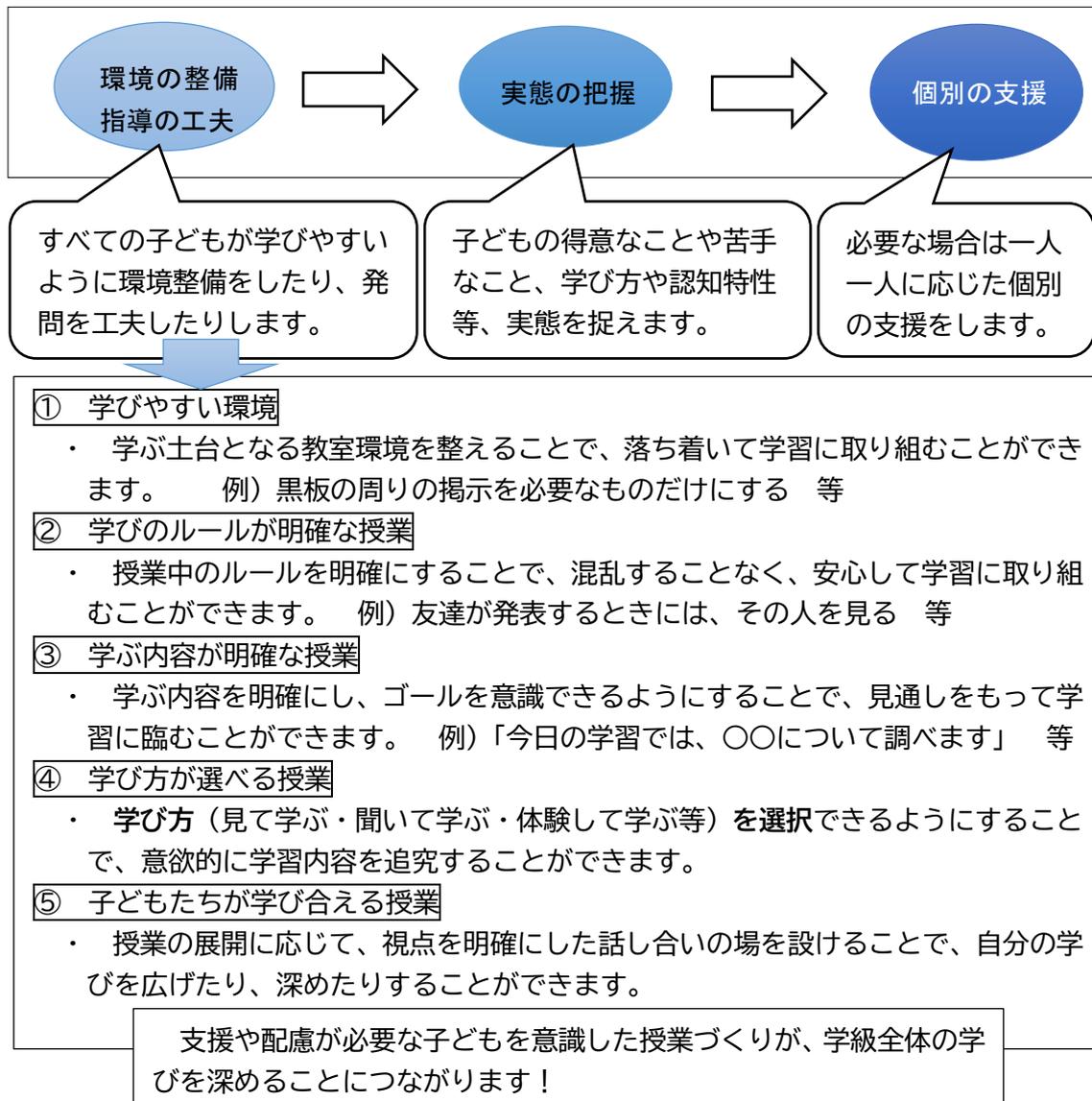
子どもたちは、どのように学習内容を理解しているのでしょうか。

教科書や黒板、手本などを **見ること** によって、理解している。
教師の説明や友達の話 **を聞くこと** によって、理解している。
友達と **話し合うこと** をとおして、理解している。
とりあえずやってみて、**体験すること** をとおして、理解している。

「見ること」「聞くこと」が得意な子どももいれば、苦手な子どももいます。どの子どもも「できた」「わかった」と実感できるようにするためには、子どもが「どのように学んでいるか」「どのような学び方が得意か」ということについて理解し、指導方法を工夫・改善することが大切です。

○ 一人一人の実態に応じた授業づくり

子どもの実態に応じ、次のような流れで支援を進めていきます。



教師が教える授業から、子どもが学びとる授業へ

（参考「コーディネートハンドブック」〔2020年版〕福島県特別支援教育センター）

< 新たな不登校を生まない学校づくりと不登校児童生徒への支援 >

新たな不登校を生まない学校づくりと不登校児童生徒への支援のため、下記を参考にしてください。

○「教師は子どもの横に立つ！」～発達支持的生徒指導の重視～

教える存在という教師観から一歩踏み出し、あらゆる教育活動において、子どもの主体性を促し、伴走し、支援する存在でありたいものです。教師は児童生徒の前ではなく、「横に立つ」ことを心がけ、児童生徒の「個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支える」ように働きかけることが大切です。



○「生徒指導は、授業で行う！」～「生徒指導の実践上の視点」を組み込んだ学習指導～

生徒指導は「学習指導と関連付けながら」充実を図ることが大切です。「4つの視点」を授業に組み込むことが、学びを委ねることや子どもを主語とした授業につながります。また、不登校の理由に学業不振や宿題未提出が多いことから、宿題の在り方についても、発達段階に応じて「自己決定の場の提供」に基づいた「自らの学びをマネジメントする家庭学習」の工夫が求められます。

○ 生徒指導巡回訪問（中学校）での各校の取組から

- ・ 学校全体として「～でなければならない」という指導の雰囲気があったが、「生徒ファースト」に立ち返り、生徒一人一人のよさを認めながら指導する教師の姿が多く見られるようになった。
- ・ L-Gate「毎日の記録」により、生徒のSOSサインを見逃さず、組織で対応することができた。

○ スペシャルサポートルーム（SSR）及び生徒支援教員配置校のサポートルームの取組から

- ・ 学級担任や教科担任のサポートルーム登校生徒への積極的な関わりにより、学級での授業に参加できる生徒が増えている。

< いじめへの対応 >

各校においては、いじめの未然防止、早期発見、早期対応に積極的に取り組んでいただいているところですが、再度下記の点を確認し、適切な対応をお願いします。

○ いじめが疑われる段階ですぐに組織に報告、組織で対応

いじめかどうかを判断するのは各学校のいじめ対策組織です。いじめに係る情報が教職員に寄せられた場合には、教職員は、他の業務に優先して、かつ、即日その情報を速やかに管理職に報告しなければなりません。なお、いじめ対策組織を開催した時は、必ず記録を残しておきましょう。

○ 適切ないじめ認知と保護者対応、並びに解消の確認

「子ども同士のトラブル」と判断して済ませてしまったことで後になって問題が大きくなってしまふことがあります。いじめ防止対策推進法のいじめの定義に照らして適切に認知することが大切です。被害・加害の児童生徒だけでなく、被害保護者への支援、加害保護者への助言を適切に行い、連携しながら被害児童生徒に寄り添った対応が求められます。

少なくとも3か月を目安として、いじめに係る行為が止み、被害児童生徒が心身の苦痛を感じていないと判断できた時は、被害児童生徒及びその保護者に確認の上、「いじめ解消」とします。

○ いじめを原因とした欠席があった場合の対応

いじめを原因とした欠席があった場合は速やかに学校教育課担当へ連絡をします。教育委員会と連携して早急な対応を行います。学校が全力で被害児童生徒を守り、不安を取り除くこと、学びを保障することを約束して安心感を与えることが大切です。すぐに登校できるようになったケースを見てみると、校長による率先した対応が功を奏した例が数多くあります。

○ 児童生徒や保護者に年度初めに説明

どの児童生徒もいじめの被害・加害になることがあります。実際に起きた場合に学校がどのような対応をするのか事前に周知しておくことで、保護者に安心感を与えらるとともに、実際の場面での対応にも理解を得やすくなります。毎年、年度初めには確実に説明することが大切です。

幼稚園訪問を終えて

<一人一人を受け止めるあたたかな学級づくり>

◇ 各園が、あたたかな学級づくりをめざして、教職員の連携を図りながら、一人一人に寄り添った保育をしています。学級づくりがすべての基盤となることを踏まえ、個々の存在を大切に保育が学級全体の育ちにつながることを念頭におき、育ち合える学級経営を工夫していきましょう。

特に、特別な配慮を必要とする幼児が在籍している学級の個と集団の育ちについては、職員間での共通理解を図り、園全体で対応していくことが大切です。

あたたかな学級づくりにつながる 幼児への意識的な働きかけ

幼児と共につくる園生活 行事や活動の内容を幼児と話し合ったり、学級のきまりを見直したりする機会をもち、みんなが納得し主体的に生活できるようにする。

個と集団のつながり 幼児が互いのよさや頑張りを感じ取れる機会をつくり、一人一人の存在意義を深めることで、障がいの有無にかかわらず、誰もが学級の一員であることを意識できるようにする。

共感的な関わり 教師の幼児理解の在り方や幼児へ対する言動が、学級の人間関係に大きく影響することを踏まえ、幼児の言葉や行動の背後ある思いを捉え共感的に関わる。

◇ 幼稚園訪問で参観した保育では、以下のようなあたたかな学級づくりにつながる取組や関わりが見られました。

- 遊びや生活の中で幼児自身が「記録に残したい」「みんなに見せたい」と感じたもの（砂場で作ったごちそう、お散歩で見つけた植物等）をタブレットで記録し発表や掲示をすることで、友達との対話を促したり満足感や達成感を味わったりすることができるようにした。
- 遊びの中で困ったこと（「ピタゴラ装置」でビー玉がうまく転がらない箇所がある等）を、幼児自身が学級のみんなに話す機会を作り、学級の友達からアイデアをもらえるようにしていた。
 - 支援が必要な幼児が、学級のみんなが静かにすると集中して降園準備ができたことを機会に、少し工夫することで、支援が必要な幼児も共に生活できることに気付かせるようなかかわりがあった。

<少人数保育における工夫>

◇ 各園で少人数保育における工夫が見られるとともに、さらに今後必要な工夫も見えてきました。

○ 園内、他幼稚園、こども園、保育所、小学校等、多様な交流を計画し、不足しがちな経験を補うよう工夫されていました。

○ 一人一人に育みたい力を明確にするとともに、週案の記録や定期的な話し合いを通して職員間で情報を共有し、教師が引き出す部分と幼児に委ねる部分を共通にした組織的な関わりがなされていました。

○ 時には教師が遊びの一員となり、本当に驚いたり共感したり、失敗したり疑問を投げかけたり等、遊びへの刺激を与える工夫がなされていました。

● 単に遊びを発展させることに目を向けるのではなく、一人一人の幼児に必要な力を見取り、その力を育むために必要な経験を明確にすることが大切です。

● ドッジボールや宝取り等の集団遊びではこれまでの概念にとらわれず、必要な経験ができるようにルールを変えたり、教師 VS 子どもたち等、遊びの方法を工夫したりすることが必要です。そのためには、教材のよさや特性を捉え直す教材研究が必要になります。



表簿訪問 ～チェックマニュアル～

《参考》

I 指導要録

全校共有フォルダ>資料室>011 指導要録関係書式

>指導要録電子化マニュアル（令和4年度末～）>01 指導要録電子化マニュアル 等

II 出席簿

全校共有フォルダ>資料室>034 出席簿

IV 健康診断票

全校共有フォルダ>資料室>養護教諭部会>04 健康診断関係

>デジタル校務を使用した健康診断票作成マニュアル

表簿	番号	確認内容	確認済	要訂正
I 指導要録	1 全体	転学、転入学の月日記載は、出席簿、除籍簿及び学校日誌と整合させる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2 全体	児童生徒の氏名は、一覧表も含め正式名を記載する。PC 上にない文字は手書きとする。外国籍の児童生徒については一覧表の備考欄に通称を記入する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3 全体	必要のない仮用紙は確実に処分する。その際、管理職立会いの下、シュレッダーで確実に廃棄する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3 一覧表	転・編入学、記入事項の変更による訂正及び抹消は、その都度一覧表 Excel データを修正、保存し、「仮用紙」に印刷して綴る。また、備考欄に、転学先、転入学前の学校名や姓の変更について記載する。変更前の仮用紙はシュレッダーで廃棄する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	4 学籍	途中の学年から特別支援学級に入級した場合、通常の学級における教育の期間等を「入学前の経歴」（スペースがない場合は「入学・編入学等」）の欄に記載する。（逆の場合も同様）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	5 学籍	転学、転入学の理由は、個票と氏名一覧表で整合性を図る。また、住民票を異動しているかどうかを確認する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	6 学籍	年度途中で担任が替わった場合は、氏名の下に担任した期間「○月～○月」を記入し、当該年度末担任のみが押印する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	7 指導	【年度末】仮用紙の裏面に作成者が押印する。 【年度始】仮用紙の表面に、学級、出席番号を記入する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	8 指導	観点別学習状況のABC評価と評定が整合するよう校内で基準を統一する。行動の記録、特別活動の記録についても、学校内で共通理解を図り、個人や学年間で異ならぬようにする。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
9 指導	長期欠席児童生徒の評定及び総合所見については、福島県教育委員会「指導要録記入の手引き（P80）」を参照し、可能な限り記載する。また、評価・評定欄は空白としない。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
II 出席簿	1	欠席、出席停止、遅参・早退についてリストにない場合は、その他ではなく、手入力で記入する。また、忌引き、通院の理由の記載は、例「忌引き（祖父葬儀）」、「通院（内科）」に統一する。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2	学期毎に「学期別出欠統計表」を印刷し、綴じる。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3	出席を空欄とする場合は、年度初めにその旨を園で作成する「記入上の注意と整理の仕方」の頁等に記載する（幼稚園）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	4	転退園の場合、除籍日の翌日以降の欄に横線を引く。氏名一覧表は、二重線を引く。（幼稚園）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	5	早退、遅参の理由は、まとめて記入せず、1日ごとに記入する。理由の表現を園内で統一する。（幼稚園）	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
III 指導計画 課題	1	学習内容の記入については、校内で表記を統一し、適正な時数管理に努める。また、年間計画で進度が把握できるようにする。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2	教科等に変更があった場合、朱書き矢印等で訂正し、計画変更の記録を残すなど、適切な内容管理に努める。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3	教科・道徳科・学級活動等の指導の内容記載を確実に言い、実施した記録として残す。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
IV 健康診断票	1	「異常なし」は斜線、法により省略できる項目は「・」、未検査項目がある場合は、「未検査（未受診）」とする。備考欄も含めて、空欄にはしない。	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>